

Title	はじめに
Sub Title	Preface
Author	後藤, 文子(Goto, Fumiko)
Publisher	慶應義塾大学アート・センター
Publication year	2014
Jtitle	Booklet Vol.22, (2014. )
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000022-0009">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000022-0009</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## はじめに

1980年代以降、新たなコンピュータ・テクノロジーは、そもそも慣性の法則から逃れえない物質としてのモノをめぐってわれわれを取り巻く文化的な状況を大きく変容させてきた。仮想的な空間において人工的でインタラクティブな現実感を創出する、いわゆる「ヴァーチャル・リアリティ（仮想現実）」という用語が、NASA（アメリカ航空宇宙局）の主導によって開発された1987年の仮想環境ワークステーション「VIEW」プロジェクトを契機として広く世界に流布したのも、日本ではちょうどバブル経済期の只中の出来事であった。当時、この言葉がある種の新鮮さをもって人々に受け入れられたことはまだ記憶に新しい。

重さという慣性の法則は、従来、社会システムや人間の知覚世界にとって不可避の基軸であったけれど、ひとたびヴァーチャル・リアリティの獲得を可能にした新たなテクノロジーが開発されると、それによってわれわれの知覚経験や想像力はあたかも新しい翼を得てそうした重さの呪縛から容易に解放されたかの如くであって、それに伴い、モノそのものをめぐる価値観や組織構造も劇的に組み替えられてきた。古い体制の超克を目指し、それへのアンチを語る概念としてすでに1970年代に取り沙汰されていた「反重力（アンチ・グラヴィティ）」といった言葉が、80年代後半から90年代にかけては、とりわけ重さではなく軽さを、物質ではなく非物質や非実体的な情報を志向する文化状況を語る一つのキーワードとして頻繁に取り上げられたことも、20世紀後半以降、われわれが日常生活において直面してきた事態を端的に物語っている。

その一方で、日々、非実体的な情報の消費を加速化させる現代社会において、こうした事態が、実はあらためて今日、感性的な存在としての芸術作品そのものの在り方や芸術家にとっての制作論をその本質から問い直してやまないということ、われわれは想起すべきだろう。なぜなら言うまでもなく近世以来、長らく芸術作品は、秩序づけられた全体としての世界、すなわち地上と天上を包摂する宇宙全体としての大宇宙（マクロコスモス）に対して、第二の自然、すなわち小宇宙（ミクロコスモス）として認識されてきたけれど、人間にとって世界を知覚する在り方そのものをも再編する現代の非物質的な情報化は、大宇宙（マクロコスモス）のアナロジーとしての小宇宙（ミクロコスモス）＝芸術創造の伝統を根底で支えている神と被造物世界、天上と地上の階層的ヒエラルキーに対する明確な意識を、換言すれば、上と下の関係に基づく軸性を容易に無化するものでもあるからだ。

ではそのうえで、このような現代の情報化グローバル時代においてあらためて芸術をめぐって問い直さざるをえないのは、何か。「コスモス」という表題の

もとに編まれた本特集の関心は、この点に向かっている。そしてそれは、非物質的な情報化世界であるがゆえに従来とは別様な在り方へと拡張されてきたわれわれ生きた人間の感覚であり、また身体的な知覚経験、さらに芸術的・感性的な想像力そのものにほかならないのではないか。

本特集において、第一部では、河本英夫氏と前田富士男氏に触覚論の視座から新たな問題提起としての論考をご寄稿いただいた。第二部は、消費社会としての現代においてなお貫して大地の力や自然のエネルギー、そして世界の根源と向き合い続けてこられた世界的な現代アーティスト、遠藤利克氏と栗田宏一氏にご寄稿いただいた論考で構成されている。第三部は、演劇学の立場から近世における宇宙観をシェイクスピアのうちに再考する小菅隼人氏のご論考と、筆者後藤の近代美術史的考察である。そして第四部では、田中浩也氏に21世紀の展望としてデジタルとフィジカルが融合する新たな感性の在りかについてご寄稿いただいた。

本特集号の試みを、現代における芸術的感性をめぐるささやかな問いかけとして受け止めていただくことが叶うなら、誠に幸いである。

慶應義塾大学アート・センター副所長 後藤文子